

神宮文庫蔵本の『紫明抄』

八木意知男

一書誌

神宮文庫蔵本たる『紫明抄』（三門一六四三号五冊）は、すでに大津有一先生が「注釈書解題」（『源氏物語事典下』東京堂版、昭和三五年刊）において紹介せられているものである。

その際、大津先生は「東京大学図書館蔵本、龍門文庫蔵本など、やはり同系統と思われる。」とされたのであるが、ここではその一つの系統を代表するものとしての神宮文庫蔵本を内容にたち入って見ておくことにする。

神宮文庫蔵本は縦二七種、横一九・二種の楮紙袋綴五冊。但し、巻二（若紫―賢木）は闕。表紙は丁字引。左によせて「紫明抄（一・二）」と打付け書きにし、右下に朱にて「共五」とある。巻頭一葉表右に「林崎文庫」の朱長方印、角印がある。又、巻末に村井古巖義敬の神宮奉納の印があり、いわゆる村井古巖献納本である。一

神宮文庫蔵本の『紫明抄』（八木）

面二四行、平仮名交り。近世初期の書写。第一冊桐壺の奥に、

本二

此抄十卷、往年曆心之比、以素叔自筆本令書写之訖。素因相伝之本也。其後第一卷為或武家仁被借卷間、後日以証本二書統欠卷者也。

権大納言源判。

本二

件本奥書云、

元応元年十二月十五日以施藥院使忠守本二書写校合早。源氏物語事彼朝臣耽其道、尋奥源、仍諸抄物等不慮相伝之、光行以後口伝令云受云々。好事之至可謂当世之独歩。此抄尤可神秘哉。

前員外面相在判。

とあり、第二冊関屋の奥に

至徳四年六月十五日、借請四生一品本二書写之了。件本以素叔自筆本二写之云々。頗可持来之証本一歟了。

少女の奥に

至徳四年六月十五日、借請四辻一品本書寫之訖。但同他本也。

とあり、第三冊の藤裏葉の奥に

曆心三年十二月十日、以素寂自筆之本書寫了。同日一校、朱点同。

水原抄一覽之次、注出之。仍不任次第隨披聞也。此外多物語可書入也。

第四冊竹河の奥に

本云、愚本内兩卷紛失之間、以証本書統了。

于時貞治四年三月十三日。

在判。

至徳四年七月上旬之比、詵覺基法印書寫了之。即午月一交了。

沙門 在判。

とあり第五冊奥に

此抄十卷之内、第五第七第九以上三帖、雖或人之手、不慮雖感得之、所殘猶依レ不尋得、借請四辻一品本、具書寫交合了。為証本之細載與書一畝。可秘之。

于時至徳第四夷則上旬終功了。

園城非人白河瓦礫沙門判。

書本奥書二、

此抄一部十卷、悉以素寂自筆本書寫了。

而此卷紛失之間、後日書加之。奥一段作者素寂自筆也。

書中撰出之間、故統加卷中二也。

時貞治四年季春十七日。

特進判。

とある。更に、第三冊藤裏葉の奥書の後に次がある。

源氏物語内書仏法所々

寺名修法論經八講
加持以不及注

夕 顏 なもたらうらひ 導師とそおかむるなる又弥勒の出世をかね給ゆくさきのためのいと
こちたし

若 紫 きた山になにかしてら又仏の御しるへはくらきに入てもさらたかふましかん
る物を又うとむけの花まちえたる聖徳太子のくた(へら)よりえたまへる(金)剛
手のすゝ

閑 屋 いしやまに御願はたしに

常 夏 法花群像品也
をしことよもりとそ大乗そしれる罪にもかそへためる

賢 木 うりうぬんにまうて給へり又六十巻といふ文のおほ又御八かういそきをさまく
心つかひし給ふ

取 磨 尺迦牟尼仏弟子となりのりてゆるゝかによみ給へり

槿 御誦經事又阿弥佛を心にかけて念したてまつり給おなしはらずにとこそよ

松 風 さかの御たうにかさりなき仏の御とふらひ若菜にさかの御たうにてやくし仏
供養し給ふとあり

夕 霧 日中の御かちへてはそうともはいりて
又むこん太子とかこほうしはらのかなしき物かたりする

鈴 虫 おとよの君の御ころさしてに花たて又法花のまんたうかけたてまつりて

又阿弥佛脇士の菩薩をの／＼ひやくたんにてつくりたり又仏の御おなじちやうたいのうへにかされ給へり又よしのちの花のなかりのやとりにへたてなくおもせ又目連か仏にちかきひりしの身にて凡此間一向法門也その日かすをたにかげとゞめ給つゝふとうそんの御ことにちかひあり

若菜

福向にはあまねき門にてもいかゞとあり又れいの五十寺のみす経又かのおほしますでらにしもまかひるまきな

蓬生

いつゝのにこり ふかき世に

葵

かちの僧とも声しつめて法花経をよみたるいとみしうごとよし又法界三昧普賢大士又声すくれたるかきりえりさふらはせ御念仏の腕たなといしひのひかたし

匂兵部卿

くひ大子^子の我身にとかひけるさとりをえてしかなと又五のなにかしも猶りしるめたきを

蛭

仏のいとるはしき心にてときをき給へるみのりにもほうへんといふ物ありてさとりなき物はこゝかしこたかふうたかひをきつゝくなん万等経のなきおほかれといひもてゆけはむねさたまてほたいほんなんとへたゞりなんこの人のうへのよきあしきはかりのことははりけり又ふけゝなるはほとけのみににもいらしくこそいひたれ

初音

いけるほとけの御くにかとおほゆ又はちすのなかの世界にまたひらせらん心ちもかくやと

橘姫

ちふつの御かさり又経をかたてにもたまうて唱世もし給又心はかりはちすの上にも思のほり又そくしりとかこのわかき人につけたり又優婆塞をこなふ山のみかき心又仏の御弟子のいむことたもつはかりのたうとさはあれと又ひほひしにあらそふ心に

東屋

いてやその何もねかひみて給へくはこそたうとからめ又やく王ほんなにとりわきてこつせんたんとかや又あたこのひしりたに時にしたかひていてすやはありけり

椎本

本にへる心さかしうひしりたつかせりもされはにやちてまひ侍ける又しつかなる所にて念のなまきれるうせんと又なかき夜のやちてさへまとはんかやくなさを又かのをこなひ給三昧

蜻蛉

七日(に)経ほとけくやちすへきよし又五巻の日なとは又仏のし給はうへんはしひをもかくしも

手習

こゝろにざるへきしんこんをよみ又功德のむくぬにてかゝるかたちにもたひいて給けれ又三望いとかしこくほめ給事也又なとん三かいちうなといふにも又りうの中より仏むまれ給はずはこそあらめ又月ことの日八かならずたうときわさをせさせ給へは薬師仏によせたまつるにももてなし給たよりに申したへ時々まい給

夢浮橋

山におはしてれいせさせ給やうに経ほとけなとを養せさせ給又御弟子になりていむ事なとまつけ給てけり又念仏をもみたれすかのさかもとに身つからおり給てうくなくかつかまつりしに又ゆめのうきはし

因に、異本成立に対して大津先生は、草稿本と献上本及び諸本転写過程における誤差の増加を考えられた(前掲書)。

二 京都大学国文研究室蔵本に比べて

相当の出入がある

さて、神宮文庫蔵本は京都大学国文研究室蔵本(角川書店版を使用する。)に比較して、項目・註記に相当数の出入が存在する。そこで、次に大きなものを列挙してみる。

卷名	桐 壺	箒 木
京都大学国文研究室蔵本	<p>いとあつしうなりゆき物 心ほそけにさとかちなる を</p> <p>あつしう 厩也 劣也</p> <p>この君うまれ給てのちは 光源氏<small>六条院</small>降誕生事</p> <p>ナシ</p> <p>ナシ</p> <p>ナシ</p>	<p>うへはつれなくみさほつ くりて</p> <p>操也</p> <p>ナシ</p> <p>ナシ</p> <p>ナシ</p> <p>さたまれるやうある物を なしくしいつる事</p> <p>ナシ</p> <p>ナシ</p>
神宮文庫蔵本	<p>ナシ</p> <p>あつしう 厩也劣也</p> <p>ナシ</p> <p>よかなかうちすくる程に なしたへはてぬ</p> <p>桐壺更衣率吉事</p>	<p>うへはつれなくみさほつ くりて</p> <p>操也</p> <p>はちすはのうへはつれ なきうらみこそものあ らかひはつくといふな れ<small>後撰</small></p> <p>さたまれるやうある物を なしくしいつる事</p> <p>ななくいへる事<small>或本</small>不 宣</p>
難なくしいつる也	<p>つらつゑつきてむかひあ たり またけらうに侍し 時</p> <p>支頓<small>フラツエック</small></p> <p>下臨</p> <p>はてくはあやしきろと もになりて</p> <p>論とも也</p>	<p>ナシ</p> <p>人くさけす 不遠也</p> <p>ナシ</p> <p>ナシ</p> <p>ナシ</p>
難なくし <small>(いっせ)</small> 思 <small>(いっせ)</small> る也	<p>ナシ</p> <p>ナシ</p> <p>ナシ</p> <p>はてくはあやしきろん ともになりてあかし給つ</p> <p>論とも</p> <p>けふそくをさへてま さへよろつ代の花のさ かりをこゝろしつかに <small>後撰</small></p>	<p>人くさけす 不遠也</p> <p>心なからもうれたく <small>或本</small>心なからけうたく 憂也</p>

さらぬわかれはなくもか
などのみなんこまやかに
の給

ナシ

世中にさらぬわかれの
なくもかなちよもとい
の人のこのため

てもあてはかにゆへつき
たれば

あてやかにほかなげに
ゆへあるさまにかきた
るといへる也

ナシ

心あてにそれかとそ見る
白露の光そへたる夕かほ
のはな

心あてにおらはやおら
んはつしものをきまど
はせる白菊の花

やうめいのすけなる物の

神宮文庫蔵本の『紫明抄』

さらぬわかれはなくもか
な

おいぬれはさらぬ別の
ありといへはいよいよ
みまくほしき君かな

よの中にさらぬ別のな
くもかなちよもといの
る人のこのため

てもあてはかにゆへつき
たれば

あてやかにほかなげに
けにゆへありさまにか
きたりといへる也

あてやかなりはかなげ
にゆへふかき也

やうめいのすけなるもの
ゝいへになん侍ける

楊名介事依有子細不述
注有別紙

心あてにそれかとそみ
るしら露の光そへたる
夕かほのはな

(八木)

<p>いゑになん侍りける 楊名介、依有子細不述 注、有別紙 はらから 一腹の兄弟姉妹也</p>	<p>いちはやき世のいとおそ ろしう いちはやき <small>すくれたるとい ふ詞也</small></p>	<p>玉 鬘</p> <p>ナシ</p>
<p>こゝろあてにをらはや おらんはつ霜のをきま とはせるしらきくの花 <small>古今 勅撰</small> はらから 一腹 兄弟 姉妹也</p>	<p>いちはやき世のいとおそ ろしう 伊勢物語云いちはやき みやひをなんしけるい ちはやきはすくれたるをいふ詞也 <small>すみやかなる事か</small></p>	<p>うちつきてハほとけの御 なかにハはつせなん日の もとのうちにあらたなる しるしあらはし給ともろ こしにもぎこえあまり 大唐傳宗皇帝千人の後 ありそのなかに馬頭夫 人と申は文宗帝の孫玄 成大子の御娘なり面な かくして馬に給へり</p>

しかれとも心になさけ
 ふかくして帝の寵愛す
 くれて夜なく御心さし
 をこたらすこれにより
 て侍輩の後そねむ心あ
 りて相儀していはくわ
 れら花のもとに衆会して
 後夫人を王に見せたて
 まつりなはさためて愛
 心うちからん歟とて花
 見会あるへきよし奏聞
 せしかはいま十五ケ日
 をへはさためて花のさ
 かりならん歟陽則錦羅
 園の花そのに会合すへ
 きになりぬこれにより
 て女御きさぎたまのか
 さりをとゝのへてわれ
 をとらしといてたち給
 に馬頭夫人かたちのみ
 にくき事をなげきて行
 業としふりて千歳をへ
 たる仙人ありこれを請
 して面貞のたゞしから

ん事をいのらしむるに
 仙人のいはく日本国長
 谷寺の観音こそ利生広
 大におはしませ東方に
 むかひて御祈請あらは
 定感応あらん歟と申す
 すなはち骨髄をくたき
 て祈請し給に七ケ日を
 へて夢の中に一人の貴
 僧紫雲にのりて東方よ
 りきたれり手をのへて
 瓶水をおもてにそゝく
 と見てさめぬすなはち
 鏡をとりにて面をみるに
 もとのかたちにあらず
 霊香たかひなし三ケ日
 をへて衆会にましはる
 時上下こそりて馬頭夫
 人をうしなへりここに
 みかとかの夫人これな
 りとていたさしめ給時
 天人影降のかたちとい
 ふへし薫香人にすくれ
 たりしかはみかといよ

初 音

ナシ

く鐘愛たくひなかり
 き夫人長谷寺の観音を
 あふきたてまつりて乾
 符三年丙申七月十八日
 侍女眷属をひきゐて明
 州の津にいてむかひて
 十種の物ならひにさま
 くくのたから物をたて
 まつらる

仏具 錫杖 如意 鐙鉢
 金剛鈴 玉帳 牛王
 法螺 虎皮 孔雀尾

巳上十三本
 踏哥式 新儀式 正月十四
 日高内子冠 打製斗囊
自所給之
持唐位
祝(一) 当夜哥頭以相率
胸唐袍
自下製(二) 集中院斬見自
 月花門参入行別左近陣
 前庭時刻出御々座 孫此南
四間平
 文御 内藏寮昇緑絹机立
 侍子
 前庭 南第
四間 王卿依古参上
寶子南第三間曹田座
人多及南廊小板敷 賜酒希出 (考)

神宮文庫蔵本の『紫明抄』

(八木)

王卿御厨子所訖入仙花
 門列立庭上踏哥周旋^{三度}
 後列立御前言吹進出当
 綿案立奏祝詞喚囊持称
 唯進而新綿敷奏消鴨次
 奏此殿曲訖着座行立間
 掃部寮当御階南辺一相
 对地为上仁寿殿西階南
 立床子為管絃座南廊小
 板敷東東上敷疊立机為
 打製斗持囊座又有諸司
 二分吹管絃者同着之同
 壁下北面西上為殿上侍
 臣座内藏昇四尺台盤
 三基立舞人以上座八尺
 台盤一基為管絃吉座弁
 備者膳次王卿已上下殿
 勸盃侍臣所雜色已下行
 酒三四巡後漸調子唱竹
 河曲即起座列立三四唱
 後舞人已上雙舞進平上
 東階内侍二人相分被綿
 且舞且還 女三人持
綿西側内侍後 但彈
 吟者已下男藏人二人伝

取御簾中於庭中被之奏
 我家曲退出自北廊戶其
 後踏哥所々眺更帰參
 御座如初哥頭舞人賜
 座於庭中相對前給者在
 横切北上上面面打熨斗囊
 持座在南折座西上北面
 出御之
 後王卿(マ)先候實子哥頭已
 下依召參入着座賜酒饌
 此間奏管絃數巡之後賜
 祿有着事早退出哥頭友
 子染掛各一領掌踏同色
 袈一条吹物襖子一領打
 熨囊持絹一疋内藏寮立
 高机積綿百貫延長七年
(季)季部王踏哥人袈垂役冠
 趨塵開脇袍自下襲着除
 沓持白杖以着立冠前官
 袍脱釵擽鞞高巾子着綿
 面童子二人者舞人到
右衛門督兒令河左
 被貞文字舊謂町左少将何
 扶進中間綿台東供早唱
 囊持二声清弘祢唯到綿

枝 梅	蚩	蝶 胡	
あさみとりきこえこちし 御めのと 六位宿世といひし事也	ナシ ナシ ナシ	ナシ ナシ ナシ	きふにはつるほと 急にまひはつる也
ナシ 六位宿世といひし事也	ナシ 異本こまのこものかたり 古物語也	ナシ 紀州乃帝弟 り ひとのみかとのさゝつく	きふにはつるほと 急にまひはつる也 とりにはさくらほほな かてうには山吹のかさね 鳥校細長 蝶山吹重
			かへり 香殿 <small>右大臣女御</small> 次東 踏早參 御前左右大臣有障共不 參宿所故不踏

角 総	脚 部 兵 匂
<p>ナシ</p> <p>ナシ</p> <p>ひきとゝむへきかたなく あしすりもしつへく</p> <p>伊勢物語云、やうやう よもあけゆくに、見れ は、ゐてこし女もなし、 あしすりをしてなげと も、かひなし</p> <p>白玉かなにそと人のと ひし時露とこたへてけ なましものを</p>	<p>ナシ</p> <p>ナシ</p> <p>かにこそけににたる物な かりけれ</p> <p>ふる雪にいろはまかひ ぬ梅の花かにこそにた る物なかりけれ</p>
<p>ナシ</p> <p>ナシ</p> <p>いとくうつきてたのもう きこゆ <small>(効カ)</small> 切つきたる也</p>	<p>ナシ</p> <p>かにこそけににたる物な りけれ</p> <p>ふる雪に色はまかひぬ 梅の花かにこそにたる 物なかりけれ</p> <p>神のますこのみやしろ にたつややおとめたつか ややをとめ神のやすとも うたひ詞には有三説</p>

蔵 早

<p>ナシ</p> <p>ナシ</p>	<p>ナシ</p> <p>ナシ</p> <p>さきにたつなみたのかは に身をなけは人にをくれ ぬいのちならまし</p> <p>日本記云、<small>ツト</small>集近習人、 悉生理陵辺事</p>
---------------------	---

あけまぎの大君かくれ給
ての中君匂宮むかへら
れ給時弁尼公歌にさきに
たつ涙の川に身をなけは
人にをくれぬいのちなら
まし

日本紀云集近習人悉
生理陵辺事

従死者事

繆公卒葬雍

皇覽曰秦穆公家
在雍米祿宕祈

年訓 従死者百七十七人

秦之良臣子興氏三人名

曰奄息中行葭虎史記秦本記

集近習人悉埋陵辺事

本記

垂仁天皇廿八年冬十月

天皇母弟倭彦命薨十一

月倭彦命葬于身挾桃花

鳥坂於是集近習者悉生

而埋立猶陵城數日不死

尽泣吟遂死而爛鼻之大

鳥聚噉焉天皇聞此泣吟

之声心有悲傷詔群卿曰

夫以生所愛令殉己者是
甚傷矣 甚雖古風之良何
從自今以後儼之心殉
シスルモノニシタ
カハシムルコト

しるのはのをとにはおと
りておほゆ

わするとはうらみさら
なんはしたかのとかへ
る山のしるはもみちす

後撰

はしたかのとかへる山
のしるしはのはかへは
すとも君かへはせし

拾遺

いゑにあればけにもる
いゑをくさまくらたひ
にしあればしるのには

もる 有間皇子

月見るはいみ侍ものを
おほかたは月をもめて
しこれそこのつもれば
人のおいとなる物

月見るはいみ侍しものを

おほかたは月をもめて
しこれそこのつもれば
人のおいとなるもの

しるのはのをとにおと
りておほゆ

わするとはうらみさら
なんはしたかのとかへ
る山のしるはもみちす

後撰

はし鷹のとかへる山の
しるしはのはかへはす
とも君はかへさし

拾遺

家にあるはけにもるい
ひを草まくらたひにし
あればしるのにはにもる
有間皇子

なほし物とか
除目直物也

ナシ

三(朱)

ふナ〇くまいらせ給へり

粉熟

ナシ

二(朱)
こてのせに

囲碁出銭

皇子降誕時
有之

きんのふ

琴譜

おととりたまてそうし

きさらぎのついたちころ
になをし物とかいふ事に
権大納言になり給て左大
将うけ給つ左のおほい殿
除目の直物也ひたりに
ておほしけるか辞し給
へるところなりけり

ふすくまいらせ給へり

粉熟

五日の夜は大将殿より屯

食五十具

こてのせにわうはんなど
はよのつねのやうにてこ
もちの御まへの

こてのせに囲碁出銭

皇子降誕之時在之

親王誕生時有碁出銭事

故六条院御てつからかき
給て入道の宮にたてまつ
りしきんのふ二卷五葉の

給

大臣 奏

おりてふたうし給

舞踏

くたりたるさにかへりつ

き給

下座

よろつよをかけてにはは
ん花なればけふをもあか
ぬいろとこそ見れ

飛香舎藤花宴 延喜御

門御製

かくてこそ見まくほし

けれよろつよをかけて

にはへる藤波の花

藤ニ有万歳藤之号

枝につけたるをおとと^{大臣}

りてそうし給^奏

ふちのはなのえんせさせ

給

藤花宴

今上御歌

百代をかけてにははん花
なればけふをもあかぬ色
とこそみれ

飛香舎藤花宴延喜御門

御製

かくてこそみまくほし

けれ万代をかけてには

へるふちなみの花

今上御歌にははんとは

延喜のかく仰られしか

は藤に万歳の名のあれ

はけふにはかきらしと

の給へるにや万歳藤者

藤の名なれば也

おりてふたうし給

舞踏

ナシ

ナシ

かんざしのかきりつたへ
て見給けん

金釵鈿合各折其半授使

者曰 為我謝太上皇○

好藏是物

長恨歌伝

くたりたるさにかへりつ
き給

下座

大将の君のあなたそとう
たひ給へるこゑもかきり
なくめてたかりけり

安名尊 先にます

かんざしのかざしのかき
りへたてて見給けんみか
とは猶いふせかりけむ

絶天海跨蓬壺見軍高仙

上多楼閣西廂下有洞戸

東嚮關其門署曰玉妃大

真院万玉抽簪叩扉有雙

髮童女出応門于時雲海

沉沉洞天日晚瓊戸重闔

悄然無声言淀細然指碧

衣女取金釵鈿合各折其

半授使者曰為我謝太上

皇謹獻是物尋旧好也好

藏是物長恨歌

東 屋

なをひと
真人
とみといふめるいきほひ
富イキホヒ徳
らいねん
来年
つるによるせはさらなり
や
おほぬさとなにこそた
てれなかれてもつゐに
よるせはありといふも
のを

ナシ
ナシ
ナシ
ナシ
ナシ
ナシ

木 篇

なかゝはのわたりなるい
へなんこのころ水せきい
れてすゝしきかけに侍と
きこゆ
中河今京極河也
見季部王記 古人称中
河 法成寺之始 人称
中河御堂之由 在行成

なか河のわたり
(季)
今京極川也 見季部王記 古
今称中河法成寺始人称
中河御堂之由在行成記
柴花物語云中川辺に御
堂をたてらる 東北院
法成寺等也
今案賀茂川謂

生 寄	顔 夕	給
<p>あくるまさきとつかつね なきよにならすふるか心 くるしきなめりかし 譬日及之在条恒雖尽而 不悟 <small>文選歌近賦</small> 日及は朝 顔花也</p>	<p>長月長瀬人心 <small>文集</small> 女為狐媚害則深 日 猶浅 一朝一夕迷人眼 假貴重真 狐假女妖害 此假 俱迷人 人心惡 色迷人 心過此 彼直 假色迷人 猶若是 直 の給</p>	<p>いつれかきつねならんた ゝはかられ給へかしとの 給</p>
<p>はな心におはする宮なれ はあくるまさきて 譬日及之在条恒雖尽而 不悟 <small>文選歌近賦</small> 日及は <small>朝顔花也</small></p>	<p>狐 日長月長瀬人心 <small>文集古蒙</small> 迷人服女為狐媚害則除 女媛害漏沙 一朝一夕 人人々心惡 假貴重真狐 人 心過此 彼真此假俱迷 人 應過此 彼真此假俱迷 假色迷人 猶若是 真色迷 の給</p>	<p>東河桂川を為西川京極 川を謂中川歟</p>

以上、項目・注記の出入の大きなものをみて来た。このほか、例

えは、

の如く、源語本文引用の量が異なるもの、あるいは語句の異なるもの（「或」又は「或本」と記された異文は、京大本本文に一致するところが多い。出来るだけ原文に従ったが、やむをえず又、通用字体に改めた部分もある。）等は随所に存在するが煩雑になるので省略しておく。

神宮文庫本では卷二（若紫巻／賢木巻）がかけているので、この部分が比較の対象とはならないことは言うまでもないが、卷七（若菜巻／鈴虫巻）巻八（夕霧巻／竹河巻）にさしたる差が存在しないのは第四冊竹河の奥に「本云 愚本内両巻紛失之間以證本一書統了」と先に示した識語があることよりして、この二巻は異系統本にやったことが明白である。

以上、神宮文庫蔵本の内容を紹介した。

紫明抄が、異本紫明抄あるいは河海抄に与えた影響は大である。と同時に、紫明抄自身、次第に注記の量を増していったのであり、神宮文庫蔵本はそのことを如実に示しているといえるであろう。

なお本稿をなすに当つて貴重書の閲覧を快諾下された神宮文庫に深謝申し上げます。

（昭四五・四・二三）

皇学館大学講演叢書

第一輯	青年学徒に告ぐ	皇大総長	岸	信介	(60)
第二輯	明治維新百年を迎へて	皇大教授	久保田	収	(60)
第三輯	神宮の式年遷宮	皇大教授	谷	省吾	(60)
第四輯	現代の国学	皇大教授	重松	信弘	(60)
第五輯	日本人と武の道	皇大教授	佐藤	通次	(70)
第六輯	家庭の祭祀	皇大校長	高原	美忠	(80)
第七輯	歴史の継承	皇大 学事顧問	平泉	澄	(60)
第八輯	信仰と人生	皇短大 助教授	岡田	重精	(70)
第九輯	現代生活と神道	皇大教授	谷	省吾	(80)
第十輯	東西の人間観	皇大教授	野口	恒樹	(70)
第十一輯	藤田東湖先生を仰ぐ	皇大教授	荒川	久寿男	(70)
第十二輯	事業経営の道	皇大教授	佐藤	通次	(60)
第十三輯	孝明天皇	皇大教授	久保田	収	(60)
第十四輯	西郷隆盛	皇大教授	谷	省吾	(60)
第十五輯	橋本景岳先生を仰ぐ	皇大教授	三木	正太郎	(80)
第十六輯	憶良の人と作品	福岡女子 大学長	倉野	憲司	(70)
第十七輯	経国の大業	皇大 学事顧問	平泉	澄	(60)
第十八輯	歴史と文学	評論家	福田	恆存	(60)

() 内の数字は頒価。(送料各三五円)

発行所 皇学館大学出版部

伊勢市倉田山(郵便番号五一六)
振替口座名古屋 一六三二六番